

男鹿市文化財調査報告第38集

市内遺跡試掘・確認調査報告書

2011・3 秋田県男鹿市教育委員会

男鹿市文化財調査報告第38集

市内遺跡試掘・確認調査報告書

2011・3 秋田県男鹿市教育委員会

序

男鹿市内には、太古の時代から現代に至る人々の生活の変遷を示す埋蔵文化財が約320カ所で確認されています。これらの埋蔵文化財は、ふるさとの歴史を学ぶ貴重な財産であり、未来へ引き継いでいかなければならない文化遺産であります。

近年、道路建設や宅地造成など、豊かで快適な生活を築くための開発事業が行なわれ、埋蔵文化財との調整を図ることが急務となってきております。それらの各種事業に伴う遺跡の試掘・確認調査は、市の歴史を次世代に継承していく上で最も基礎的な作業であります。

当教育委員会では、様々な開発事業との調整を図りながら、埋蔵文化財を保存・活用することに取り組んでおり、事業実施に伴う試掘・確認調査の他、史跡脇本城跡の調査や整備も継続して実施しております。また、現在これら遺跡の基盤をなす大地の活動の営みを重視したジオパーク構想を掲げており、隣接する大潟村とともに、「男鹿半島・大潟ジオパーク」として日本ジオパークネットワークへの登録に向けた活動も行っております。

本報告書は平成20年2月から平成23年3月まで国庫補助と県補助を受けて実施した市内遺跡の試掘・確認調査の報告書です。この報告書が文化財保護活動の啓発と、学術研究の発展にいささかでも寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係各機関をはじめ関係者の方々に深く感謝するとともに、今後とも埋蔵文化財の保護につきましてご理解くださるようお願い申し上げます。

平成23年3月

男鹿市教育委員会

教育長 杉 本 俊比古

例　　言

- 1 本報告書は、平成20年2月から平成23年3月まで、男鹿市教育委員会が国庫補助金、県補助金を得て実施した遺跡の試掘・確認調査報告書である。
- 2 本報告書に収録した遺跡の試掘・確認調査は、男鹿市教育委員会生涯学習課文化財班の職員が担当した。
- 3 本報告書に使用した地図は、男鹿市管内図50000分の1、男鹿市都市計画図2500分の1、10000分の1地形図と、各工事施行者から提供された工事用図面である。
- 4 本報告書に使用した土色表記は、農林水産省技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1997後期版』によった。
- 5 調査にあたっては、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室よりご指導をいただいた。
- 6 本報告書に掲載した遺物及び記録類は、男鹿市教育委員会生涯学習課において保管している。
- 7 本書で参考とした文献は第3章末に一括して掲載した。

凡　　例

- 1 掲図の調査位置図については、主として男鹿市管内図、男鹿市都市計画図を使用し、一部事業関係で作成した図面を使用した。
- 2 掲図の縮尺と方位は不統一であり、それぞれ図ごとに縮尺と方位を示した。

調査体制

調査担当者 男鹿市教育委員会

調査体制 男鹿市教育委員会生涯学習課文化財班

生涯学習課長　泉　明（平成20年度）

三浦　進（平成21年度～）

文化財班

主幹　千田常己（平成21年度）

主幹　笹川貞俊（平成22年度～）

課長補佐　渡部源夫（平成20年度）

主査　竹内弘和（平成21年度～）

主査　伊藤直子

学芸主任　五十嵐祐介

目 次

序

例 言

凡 例

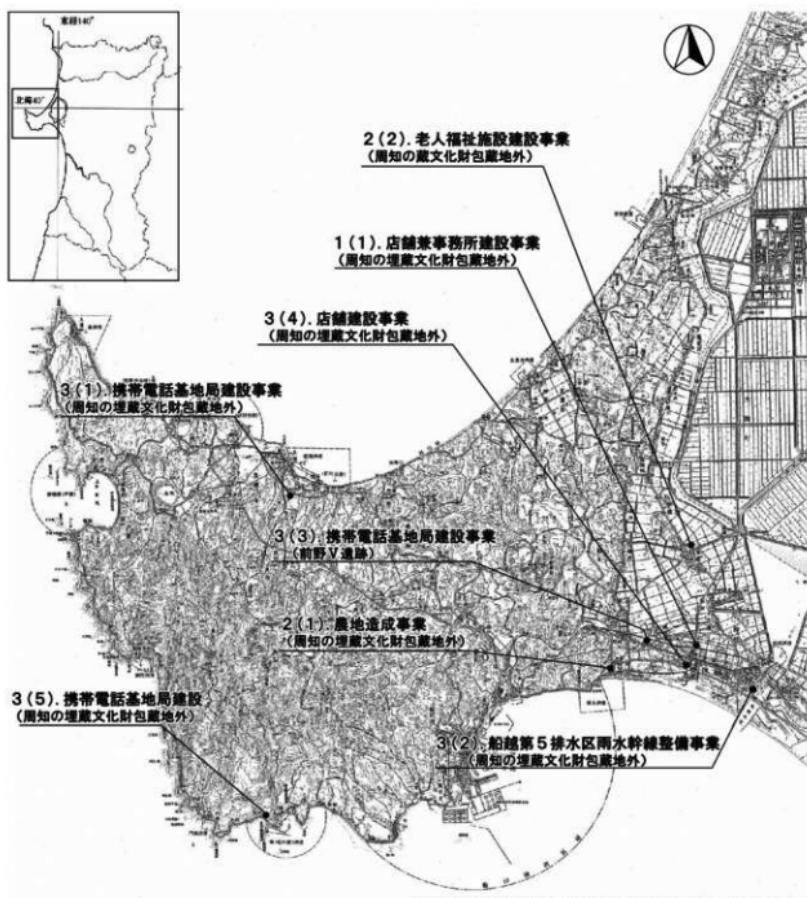
調査体制

第1章 事業の概要	1
第2章 男鹿市の位置と環境	2
第1節 男鹿市の位置と立地	2
第2節 男鹿半島の地形と地質	2
(1) 男鹿半島の地形	2
(2) 男鹿半島の地質	4
第3章 試掘・確認調査	9
第1節 平成20年度の調査	9
(1) 店舗兼事務所建設事業（周知の埋蔵文化財包蔵地外）	9
第2節 平成21年度の調査	12
(1) 農地造成事業（周知の埋蔵文化財包蔵地外）	12
(2) 老人福祉施設建設事業（周知の埋蔵文化財包蔵地外）	15
第3節 平成22年度の調査	18
(1) 携帯電話基地局建設事業（周知の埋蔵文化財包蔵地外）	18
(2) 船越第5排水区雨水幹線整備事業（周知の埋蔵文化財包蔵地外）	21
(3) 携帯電話基地局建設事業（前野V遺跡）	24
(4) 店舗建設事業（周知の埋蔵文化財包蔵地外）	27
(5) 携帯電話基地局建設事業（周知の埋蔵文化財包蔵地外）	30
参考文献	33

第1章 事業の概要

男鹿市内には縄文時代から近代までの遺跡が存在しており、現在、319カ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている。

平成20~22年度に周知の埋蔵文化財包蔵地、遺跡存在可能性地における公共事業及び民間による開発行為などについて、事前の事業照会と協議を経て、試掘調査を実施した。その数は8カ所である。なお、本書には平成20年2月から平成23年3月までに行った調査について掲載している。



第1図 試掘調査位置図 (1 : 150,000)

第1表 試掘・確認調査一覧

No	調査原因	事業名	遺跡名	所在地	事業主体	調査期日
1	試掘・確認調査	店舗兼事務所建設事業	—	男鹿市船越字根本	有限会社セイカ	H21.3.18
2	試掘・確認調査	農地造成事業	—	男鹿市臨本脇本字福荷下	天喜建設株式会社	H21.8.6
3	試掘・確認調査	老人福祉施設建設事業	—	男鹿市松戸字渡部	社会福祉法人祥泉会（仮名称）設立準備室	H21.10.21-22
4	試掘・確認調査	携帯電話基地局建設事業	—	男鹿市北浦北浦字泉野	KDDI株式会社仙台エンジニアリングセンター	H22.4.15
5	試掘・確認調査	船越第5排水区雨水幹線整備事業	—	男鹿市船越字一向	男鹿市産業建設部下水道課	H22.8.31
6	試掘・確認調査	携帯電話基地局建設事業	前野V遺跡	男鹿市臨本字前野	KDDI株式会社仙台エンジニアリングセンター	H22.11.25
7	試掘・確認調査	店舗建設事業	—	男鹿市船越字内子	株式会社ローソン	H23.2.9
8	試掘・確認調査	携帯電話基地局建設事業	—	男鹿市船川港双六字蔵台	KDDI株式会社仙台エンジニアリングセンター	H23.2.17

第2章 男鹿市の位置と環境

第1節 男鹿市の位置と立地

男鹿半島は秋田県のほぼ中央部にあり、本州から日本海に約25km突出した本県唯一の半島である。この半島は、かつて島であったが、隆起や雄物川・米代川の両河川が運ぶ土砂や北東季節風がもたらす飛砂などの影響によって八郎湯を包む形で本州と結びついたといわれている。

平成17年3月に旧男鹿市と旧若美町が合併したことにより、半島全域が男鹿市域となった。東西約24km、南北約24kmで、面積が約241km²あり、北東側は三種町、東側は大潟村、南東は潟上市と接している。

第2節 男鹿半島の地形と地質

(1) 男鹿半島の地形

男鹿半島の地形は西部山地、中央丘陵地、寒風山地及び潟西低地の四つに区分される。そのうち西部山地が骨格となり、これを基盤として新しい岩層が次々と生成した。半島の主峰は西部山地の本山(716m)で、分水嶺は西側分水嶺（入道崎一本山一毛無山一潮瀬崎）、中央分水嶺（毛無山一寒風山）と東側分水嶺（五里合一寒風山一生鼻崎）が河川流域を4区分している。

西部山地は、第三紀のグリーンタフ火山活動による火山噴出物が主体となっている山地で、西海岸の本山西方は急峻な山岳地帯をなしており、谷の刻みは深い。海岸はこまかい屈曲がきわめて多く、歩行も困難な急崖と岩礁が連続する。この複雑な屈曲は無数の岩脈によるものである。

海岸平地は乏しく、戸賀湾と加茂青砂の狭い平地に集落があるにすぎない。西部山地の北部には数段の海岸段丘が発達している。

中央丘陵地は西部山地の東側に広がり、含油第三系の軟弱な水成岩よりなる。海岸段丘によって数段の平坦面ができ、さらに河谷によって細かく開析されて低位丘陵をなしている。

寒風山地は、本来中央丘陵地と同質の地質であるが、含油第三系の褶曲・断層構造帯に噴出した寒風火山によって地形の変化を生じたものである。寒風山（355m）は新期火山で、楯状円錐火山（コニトロイデ）に属する。

湯西低地は、寒風山地の東に広がる地域で、湯西層の堆積面である湯西台地と八郎湯の沖積面からなり、その間に五里合盆地がある。北部では段丘上に砂丘が発達するが、南部では脇本一飯ノ町一小深見の砂丘を基として、それ以南に発達した砂州・砂丘が本土側から延びた砂州と連なっている。

男鹿半島の海岸線は北岸、西岸、南岸からなる。北岸が五里合から入道崎までの間である。五里合から相川までは比較的単調でゆるい弓形をなす。この部分の海岸はおおむね背後に海食崖の連なる狭い砂浜となっている。相川以南では海食崖が海に迫って砂浜がほとんど無くなり、西黒沢から入道崎まで凹凸に富む岩石海岸となっている。

西岸は入道崎から門前まで続く。戸賀湾と加茂の湾入り部を除けば海岸線はほとんど直線的に南北に連なり、きわめて細かい凹凸に富んでいる。また数多くの小さな島が点在する。ここは西部山地の急な斜面が直接海に落ち込んでおり、大部分が磯浜で砂浜は戸賀湾などの入り江の奥にわずかに見られるだけである。

南岸は門前から船越まで続く。門前から船川までは塩瀬崎・館山崎・金ヶ崎・鶴ノ崎の4つの比較的大きな岬が突出する岩石海岸である。脇本以東は背後に砂丘が配列する広い砂浜になる。本山の南側には第2の高峰である毛無山（677m）が、北側には真山（567m）が続いている。

寒風山は標高355mの小規模な成層火山であり、中央丘陵地の上に噴出した熔岩がその山体の大部分を形成している。熔岩は主に安山岩であり、玄武岩もわずかに噴出している。火山としての地形を非常によく残しており、姫ヶ岳の東斜面にある第2火口、同じく北側にある第1火口等の火口、熔岩流の表面に発達する熔岩堤防や熔岩じわなどが観察される。

男鹿半島北西部の戸賀湾周辺に存在する3つの目潟群は、いずれもマールと呼ばれる火山の火口に水がたまつるものである。どの目潟もほぼ円形で、底がほぼ平らであり、それぞれが1回のマグマ水蒸気爆発、もしくは水蒸気爆発によって形成されたものと考えられている。目潟火山の活動は、最近では三ノ目潟が約2万～2万4千年前、一ノ目潟が約6万～8万年前に形成され、二ノ目潟は一ノ目潟と三ノ目潟の中間に推定されるようになった。この年代は、目潟噴出物からなる地層と段丘面との関係や広域火山灰との層位関係、さらに湖底堆積物の放射性炭素による測定年代などに基づいた推定である。一ノ目潟は平成19年に国の天然記念物指定を受けている。戸賀湾自体も円形の湾であり、その周囲に戸賀浮石層と呼ぶ火山噴出物を堆積するが、目潟とは違う成因によるものと考えられている。

男鹿半島は面積が狭いので大きな河川は無い。しかし多くの小河川が西部山地から放射状に日本海に流出している。いずれの河川も流域面積が小さいことから水量は少ないが、地形が急峻であることを反映して急流である。

半島内で最も長い川は滝川であり、毛無山の南斜面に発し東北東に流れ下り滝川付近で北に向を変え、浜間口で日本海に流れ出ている。比詰川は毛無山と寒風山を結ぶ分水嶺の南側を流れて羽立から日本海に流れ出ている。

男鹿半島の段丘は大部分が海成段丘である。これらは更新世以後の海水準変動、地盤の隆起など

の原因で形成されたものであり、今のところ7段に区分されている。そのうちもっとも広く分布している段丘は湯西段丘と名付けられている。この段丘は半島東部では堆積段丘であり、段丘面の下には厚さ20~30mに及ぶ湯西層が存在している。

それに対して西部では堆積物は数mと薄く、侵食段丘の様相を呈する。このことから、湯西層堆積当時、現在の半島東部は地層が厚く堆積するような海であったが、西部は陸（島）であり、その周辺が波食台をなしていたと考えることができる。

湯西段丘より新しいのは相川段丘で、半島北岸、南岸に広く分布する。この段丘面は海岸付近から見たときもっともよく目立つ。たとえば南岸の金ヶ崎から東にいたる鶴ノ崎方面を見ると、海岸から切り立った崖があり、その上が広大な台地になっている。また北浦付近は広い水田地帯になっているが、これらの平らな面が相川段丘である。最も新しい橋本段丘は、縄文時代前期の海進時の堆積物によって構成されている。

一方、湯西段丘より高い段丘には、下から下真山段丘、上真山段丘、金ヶ崎段丘、金ヶ崎高位段丘がある。これらの段丘も形成当時は西部山地付近では波食台になっており、その部分が現在段丘の平坦面として認識されている。

八郎湯沿岸の低地は八郎湯の沖積平野である。この平野の南部では秋田市まで連続する3列の砂州が発達し、表面は砂丘化している。北部の砂州は能代以北まで連続する。

この他に五里合盆地がある。これは東、南、西側の三方が湯西台地で、北の日本海とは橋本段丘やそれを覆う砂丘によって隔てられている。

(2) 男鹿半島の地質

男鹿半島は、そのほとんどが新第三紀と呼ばれる地質時代からなっている。さらにその地層は日本における新第三紀の標準的な地層「標式地」の一つとして古くから多くの研究がなされてきた。近年、第四紀の地層研究も飛躍的に進み、日本海側の地史を編む上で貴重な地層が分布することも知られるようになった。

○第三紀層

・基盤岩

西部山地の北西端、入道崎から赤島にかけては、男鹿半島最古の岩石であるアダメロ岩の露頭と、これを不整合に覆って分布する赤島層が見られる。露出するアダメロ岩は、男鹿半島の基盤とされる岩石であり、権現岩、鬼の田ッコ、昆布浦の3ヵ所に、径10数mの小岩体として露出している。全体的に淡紅色または淡緑色を呈している。

・門前層群

門前層群は半島第三系の最下部を代表し、主として火山噴出物からなり、西部山地に広く分布する。火山活動の性質から、これを下位の赤島層と上位の門前層とに区別する。

・赤島層

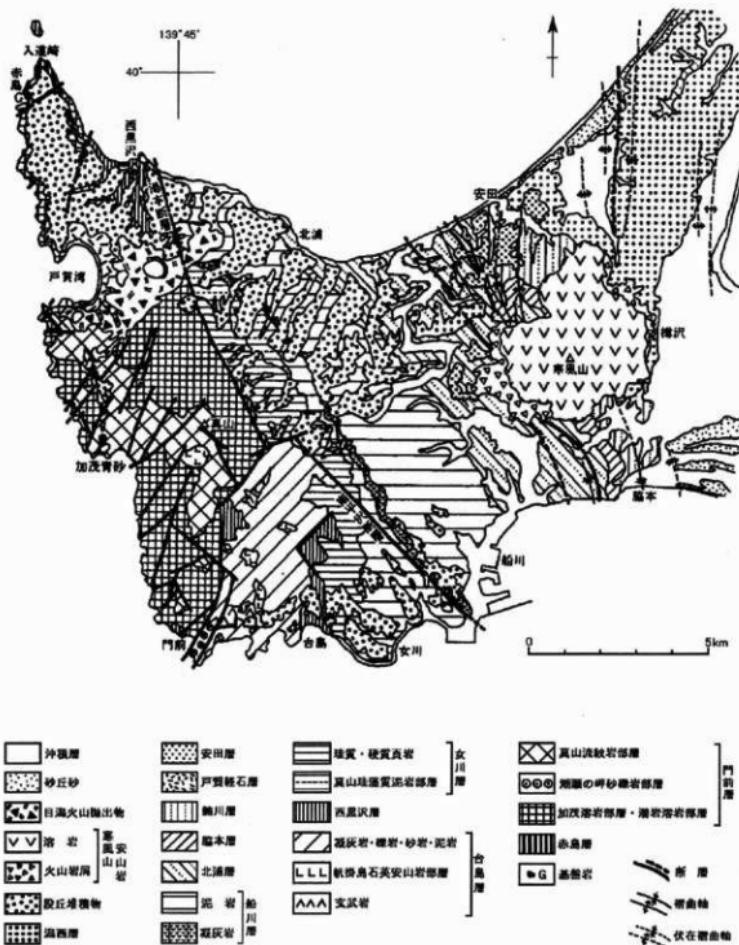
入道崎一帯の畠漁港付近から、鹿落崎を経て赤島付近の海岸に分布する。赤島層は男鹿半島の最下部層であり、赤島熔岩類と入道崎火成岩の2つの部層に分けられる。赤島熔岩類は、安山岩類とそれらの火成岩類から構成され、入道崎の先端部から赤島にかけて分布している。入道崎火成岩は、赤島熔岩類の上位に位置する地層で、石英安山岩質の溶結凝灰岩を主体とし、畠漁港付近から赤島にかけて分布している。

・門前層

主として火山噴出物からなり、半島の西海岸から本山を最高峰とする山岳地帯にかけて分布する。下位より潜岩熔岩部層、加茂熔岩部層、潮瀬の岬砂礫部層、真山熔岩部層の4つの部層に細分される。

・潜岩熔岩部層

西海岸に広く分布するほか、毛無山西斜面中腹から塩戸にかけて分布する。男鹿水族館G A O付近の海岸には変質粗面岩質安山岩が露出する。また戸賀湾北方のかぶき岩付近では、玄武岩質の枕状熔岩が見られる。



第2図 男鹿半島地質図 (的場ほか1989)

・加茂熔岩部層

西海岸の戸賀から門前にかけて広く分布している。このうち金ヶ崎や桜島付近の海岸では玄武岩～玄武岩質安山岩が、門前西方の居帽子岩付近では加茂熔岩類下部の玄武岩を観察できる。

・潮瀬ノ岬砂礫岩部層

潮瀬崎一帯に分布し、主に角礫岩～凝灰角礫岩からなり、一部に凝灰質の砂岩や泥岩を挟んでいる。潮瀬ノ岬砂礫岩部層に含まれる植物化石にはマツ、ツガ、トウヒ、ニレなどがある。このような植物組成は、現在の温帶北部の組成と近似している。従って当時の男鹿の気候は、現在とはほぼ同じ程度であったと考えられる。

・真山流紋岩部層

塩戸一加茂一真山一毛無山地域に分布する。主に黒雲母流紋岩からなり、火碎岩を伴う。全体的に淡い紫色を呈し、縞模様の見事な流理組織を作っているこの流紋岩は「男鹿の縞石」として知られている。このうち加茂青砂の天ヶ鼻に露出する流紋岩は、アノーソクレスを含んでおり、アノーソクレス流紋岩といわれているが、日本では数例しかない特殊な岩石として貴重である。

・台島層群

環日本海に地域的大規模沈降が起り、そこへ暖流系の海浸が始まり、次第に海域が全域に拡がった時代の堆積物で、火山活動は引き続き陸海にわたって激しかった。下位が台島層、上位が西黒沢層に分かれる。

・台島層

南磯海岸の小浜から台島にかけて分布している。そのうち双六漁港から椿漁港にかけては、白色から緑色を呈する凝灰岩が露出している。これらの岩石は、いわゆるグリーンタフ（緑色凝灰岩）と呼ばれ、台島層の代表的な岩石である。このグリーンタフは、時代的にも地理的にも特定の分布を持っており、日本の新生代の地史における重要な産物の一つである。

また台島層の植物化石は、現在日本に生息していないリクイダンバー（フウの一種）やコンプトニア（ヤマモモの一種）が主体となっている。これは温帶から亜熱帯の植物組成に近く、当時は気候が温暖であったと考えられる。この時代の植物化石も広く分布し、組成も似ているので、代表的な産地の名をとって、台島型植物群と呼んでいる。

・西黒沢層

西黒沢の漁港から西へ約1kmの海岸は、海際に崖が連なり、さまざまな岩石からなる西黒沢層が見られる。この時代になって現在の男鹿地域が海になったといわれる。この時代は、日本列島の広い範囲で沈降が起り、海が広がった。しかも非常に暖流の勢力が強く、この層には暖かい海を示す化石が含まれている。

同じ時代の地層は全県に広く分布しており、多くの地点で貝化石をたくさん含んでいる。キムラホタテといわれるホタテガイ類が主である。

・船川層群

西黒沢階の海域で大規模な海底陥没が起り、そこに新しい海水が流れ込み、広大な停滞水域に厚い石油母層泥岩を堆積した。海底火山活動も引き続いて激しく、その噴出物は乱泥流によって堆積海盆に上げられ、これが石油貯留岩の役割を果たしている。堆積物は時代の経過とともに泥岩から次第に粗粒の砂岩となり、堆積盆も埋没する。この一連の厚い含油層群を船川層群と呼び、岩相によって下位より女川層、船川層、北浦層、脇本層に分かれる。

・女川層

鶴ノ崎海岸一帯には、沖合200~300mまで女川層の波食台が広がっている。女川層をつくる岩石は泥岩である。この泥岩は珪酸分に富み非常に硬い。層理に平行に縞模様が見られ、それにそって割れやすい。このような性質から、この泥岩を珪質頁岩あるいは硬質頁岩と呼んでいる。化石は比較的豊富であり、海綿や魚の骨、鱗のほかサメの歯の化石もある。

この時代は、日本海は北に開いた大きな内湾状になったことで暖流の流入通路が塞がり、北の海から冷たい海流が流れ込んだといわれている。

・船川層

半島南海岸の船川付近から北海岸まで、約4kmの帶状に分布しているほか、半島内に広く分布する。北岸の野村付近には船川層上部の塊状灰色泥岩が分布し、野村泥岩と呼ばれている。

船川層は下位の女川層と同じように、細かい粒子からなる深海性の堆積物である。女川層を堆積した深海が、船川層の時代にも引き続き存在し、この深海に連続して堆積した地層である。また秋田油田の石油根源岩の一つとしても有名な地層である。

○第四紀層

・北浦層

北岸の北浦海岸一帯から南岸の生鼻崎まで、帶状に分布する。相川漁港から浜間口にかけては、砂岩と泥岩の互層からなる北浦層が延々と露出している。北浦層は、このリズミカルな砂岩泥岩互層で特徴づけられる。

北浦層は、女川層や船川層の時代よりもはるかに浅い海に住む貝の化石が見られるようになる。このことは、女川層・船川層を厚く堆積させた当時の海が、船川層の時代の後半から徐々に浅くなつていったことを意味する。

・脇本層

標識地は生鼻崎から脇本海岸である。砂岩と泥岩の互層からなっている。脇本層は北浦層と似た砂岩と泥岩の互層であるが、砂岩は北浦層のように凝灰質ではなく、より粗粒である。

生鼻崎付近では、北浦層中から上部と脇本層が約1200mにもわたって、ほぼ連続して露出するこの場所は、男鹿半島でも代表的な露頭である。

・鮎川層

標識地は北岸の安田海岸で、ここから南岸の脇本に延びる地帯に分布する。最下部は凝灰質粗粒砂岩で、漸次均質砂岩となり、レンズ状に礫岩や泥岩を挟み、数枚の薄い亜炭層が見られる。

貝化石はエゾタマキガイが非常に多く、ホタテガイもまた多い。しかし現在の秋田の海ではエゾタマキガイはきわめて少なく、ホタテガイは生息していない。この他にもビノスガイなど寒い海の種が多いので、鮎川層は全体として寒流の影響を強く受けた海域に堆積したと考えられる。

・安田層

北岸の安田付近の崖には脇本層・鮎川層・安田層そして湯西層などがほとんど切れ目なく露出している。ここでは、これらの地層の上下関係を直接的に確認することができる。鮎川層は更新世中期に、安田層と湯西層は更新世後期にできたと考えられている。いずれも主として海に堆積しているので、これらの地層は当時の海の様子を知るためにまたとない情報を提供してくれる。

・湯西層

宮沢付近から南へ次第に高度を増しながら寒風山の近くまで平坦な台地が連なっており、これを

潟西台地と呼んでいる。この台地に分布する砂・礫・泥層で構成する地層である。松木沢では砂層の中に軽石が含まれている。この軽石は、約7万年前に島根県三瓶火山から噴出したものであることがわかった。大量に噴出した軽石は海に流れ込み、海面に浮いて海流で流され、ここに堆積したものである。また男鹿中牧野の海岸でナウマン象の歯の化石が見つかっている。

・目潟火山

戸賀湾の東側及び南側の台地上に三つの目潟があり、東から一ノ目潟、二ノ目潟、三ノ目潟と呼ばれている湖沼がある。これはマールと呼ばれ、火山爆発の際にできたすり鉢状の窪地に水がたまつたものである。目潟（マール）は日本に数例あるだけで、東北地方では唯一の例である。また岩石学的に、マグマの成因やマントルの性質を考える上で極めて貴重な情報を持った火山であり、世界的に注目されている。その地形的特徴は以下の通りである。

	標高 (m)	直径 (m)	面積 (m ²)	水深 (m)
一ノ目潟	87	約600	260,000	44.6
二ノ目潟	40	約400	80,000	11.8
三ノ目潟	45	約400	110,000	31.0

目潟火山群の形成年代については次のような考え方がとられている。

第一期：泥流を伴う水蒸気爆発と一ノ目潟の形成（約6～8万年前）

第二期：一ノ目潟で水蒸気爆発・マグマー水蒸気爆発・軽石の放出、末期に二ノ目潟の形成

第三期：活動の小休止後、三ノ目潟の形成とスコリア・火山礫の放出（約2～2.4万年前）

・沖積層・砂丘

沖積層として主要なものは八郎潟堆積物と半島頸部の砂丘砂堆積である。八郎潟堆積物は厚さが最大約50mで潟西層を覆い、シルト～軟泥よりなる。最初の堆積は内湾性で、時代は縄文時代早期である。これが現世最初の海浸である。それから外洋性高鹹水域になる。これまでの堆積はシルトで、この上部に寒風山からとみられる火山噴出物層が挟まれ、堆積物は泥に変わるとともに内湾性となり、ヘドロになって潟化して現在に及ぶとされる。

このような潟化の推移は、南北両面における砂州・砂丘の発達によるものである。砂丘砂は腐蝕土を挟み腐蝕土の基底には火山灰が含まれる。

第3章 試掘・確認調査

第1節 平成20年度の調査

(1) 店舗兼事務所建設事業（周知の埋蔵文化財包蔵地外）

調査地 男鹿市船越字根本342-1

調査期日 平成21年3月18日

調査面積 24m²（調査対象面積1,658.57m²）

調査に至る経緯

有限会社セイカは、船越字根本地区で店舗兼事務所建設のための事業を予定していることから、男鹿市教育委員会へ事業予定地区における埋蔵文化財の有無を照会した。市教委は、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されてはいないものの、周囲に遺跡が存在することや、地形等から遺跡が存在する可能性があると判断し、事前調査の必要性がある旨を有限会社セイカへ回答した。その結果、有限会社セイカから平成21年3月13日付けで事前調査の依頼があり、埋蔵文化財の有無を確かめるため、試掘調査を実施した。

立地と現況

当該地は県道男鹿八竜線船越陸橋北側に位置する。標高約6～7mの沖積地に立地し、現況は原野で際立った土地利用はなされていない。過去に事務所等の施設が建設されていたようであり、一部コンクリートが敷設されている。

調査の概要及び結果

調査は事業予定地にトレンチ4本を設定して、重機により試掘し、遺構・遺物の有無を確認した。1～4トレンチともに、2.0m×3.0mとした。

a. 層序

調査地の基本層序は下記の通りである。

第Ⅰ層：表 土【110～155cm、造成盛土（コンクリート片やビニールを含む現代の造成土）】

第Ⅱ層：堆積土【20～25cm、黒褐色、砂質～シルト質の自然堆積土】

第Ⅲ層：地山土【灰褐色、砂質土】

※【 】内の数値は、各トレンチで得られた堆積の厚さを示す。

b. 検出遺構と出土遺物

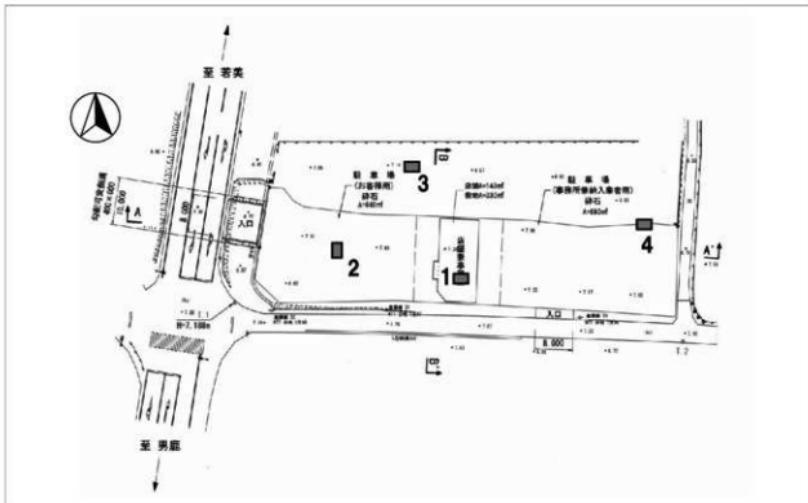
Ⅰ層内には礫やコンクリート片などを大量に含み、転圧されていた。土質の違いが明瞭で、複数回に渡って盛土造成され、内部にビニール等を含んでおり、現代の造成であった。自然堆積層と判断されるⅡ層上面及び地山であるⅢ層上面にて遺構確認を行ったが、遺構・遺物の発見はなかつた。

c. 所見

当該地については、遺跡は存在しないと判断した。



第3図 店舗兼事務所建設事業 調査位置図 (1:5,000)



第4図 店舗兼事務所建設事業 トレーニング配置図 (1:1,000)



調査地全景



1 トレンチ調査状況



2 トレンチ調査状況



3 トレンチ調査状況



4 トレンチ調査状況

写真1 店舗兼事務所建設事業 調査地と調査状況

第2節 平成21年度の調査

(1) 農地造成事業（周知の埋蔵文化財包蔵地外）

調査地 男鹿市脇本脇本字稻荷下143・144-1・148-1・148-2・169-4

調査期日 平成21年8月6日

調査面積 調査面積18.0m²（調査対象面積1,382.0m²）

調査に至る経緯

天喜建設株式会社は、脇本字稻荷下地区で農地造成事業を予定していることから、男鹿市教育委員会へ事業予定地区における埋蔵文化財の有無を照会した。市教委は、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されてはいないものの、史跡脇本城跡やその城下町である脇本遺跡に隣接し、周辺にも古代、中世の遺跡が多数存在するため、事前調査の必要性がある旨を天喜建設株式会社へ回答した。その結果、天喜建設株式会社から平成21年7月29日付けで事前調査の依頼があり、埋蔵文化財の有無を確かめるため、試掘調査を実施した。

立地と現況

当該地は海岸線に沿って広がる脇本本郷集落の北側、国道101号線に面する標高8mの沖積低地に位置する。過去には水田として稲作が行われていたが、現在は作付けが行われず、原野の状態となっている。

調査の概要及び結果

調査は事業予定地にトレンチ3本を設定して、重機により試掘し、遺構・遺物の有無を確認した。
1～3トレンチともに、2.0m×3.0mとした。

a. 層序

調査地の基本層序は下記の通りである。

第I層：表土

第II層：堆積土【30～50cm、黒褐色土】

第III層：堆積土【20cm、シルト質土】

第IV層：地山土【青灰褐色、砂質土】

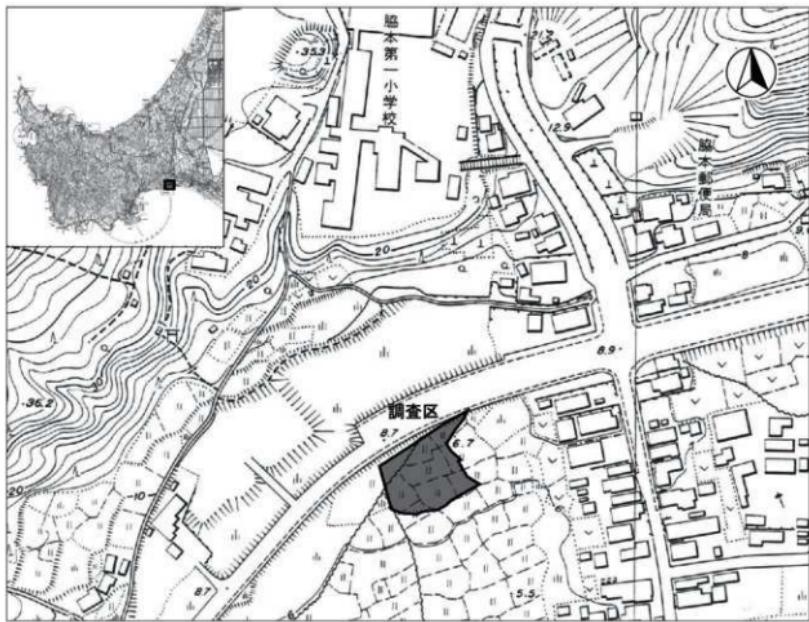
※【】内の数値は、各トレンチで得られた堆積の厚さを示す。

b. 検出遺構と出土遺物

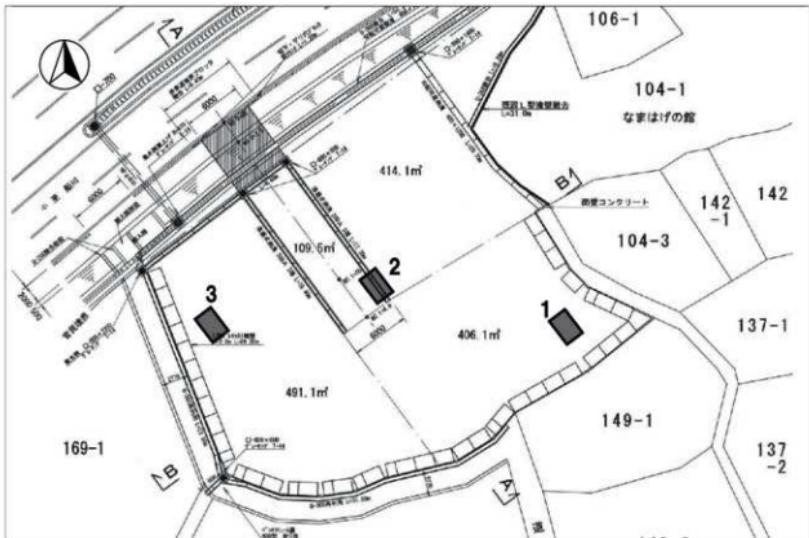
湧水が著しかったが、地山層と判断されるIV層上面にて遺構確認を行った。遺構・遺物の発見はなかった。

c. 所見

当該地については、遺跡は存在しないと判断した。



第5図 農地造成事業 調査位置図（1：2,500）



第6図 農地造成事業 トレンチ配置図（1：500）



調査地全景



1 トレンチ調査状況



2 トレンチ調査状況



3 トレンチ調査状況

写真2 農地造成事業 調査地と調査状況

(2) 老人福祉施設建設事業（周知の蔵文化財包蔵地外）

調査地 男鹿市払戸字渡部1-1・16・17-1

調査期日 平成21年10月21・22日

調査面積 55m² (調査対象面積15,417m²)

調査に至る経緯

社会福祉法人祥泉会（仮称）は、払戸字渡部地区で老人福祉施設建設事業を予定していることから、男鹿市教育委員会へ事業予定地区における埋蔵文化財の有無を照会した。市教委は、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されてはいないものの、周囲に遺跡が存在すること、また当該地のすぐ南側には、市指定史跡である「渡部家正門・村法碑」が所在するため、近世末に付近を開拓し、渡部村を開村した渡部斧松に関する遺跡が存在する可能性があると判断し、事前調査の必要性がある旨を社会福祉法人祥泉会（仮称）へ回答した。その結果、社会福祉法人祥泉会（仮称）から平成21年9月4日付けで事前調査の依頼があり、埋蔵文化財の有無を確かめるため、試掘調査を実施した。

立地と現況

当該地は県道払戸箱井線の北側に位置し、南側に払戸小学校、北側に若美南保育園がある。標高5~6mの沖積地に立地し、現況は原野である。当該地南側は碎石が敷かれ、さら地となっており、北側は林となっている。また、東側の道路からは1.5mほど高くなっている。林の内部はところで周囲より低くなっているくぼ地が確認されるなど、人工的な改変が観察された。近隣住民からの聞き取りによれば、碎石カ所には過去に資材等が置かれていたが、建築物があったことはないとのことであった。しかし、林の内部については、周囲の状況から過去に土地利用がなされたことが明らかであった。

調査の概要及び結果

調査は事業予定地にトレンチ11本を設定して、重機により試掘し、遺構・遺物の有無を確認した。1~11トレンチともに、2.0m×2.5mとした。

a. 層序

調査地の基本層序は下記の通りである。

第I層：表土【70~250cm、造成盛土（コンクリート片やビニールを含む現代の造成土）】

第II層：堆積土【0~40cm、暗褐色、シルト質の自然堆積土、腐敗植物質を多く含む】

第III層：堆積土【10~30cm、暗褐色、粘質土（北側林内のくぼ地内に堆積）】

第IV層：地山土【青灰褐色、砂質土】

*【】内の数値は、各トレンチで得られた堆積の厚さを示す。

b. 検出遺構と出土遺物

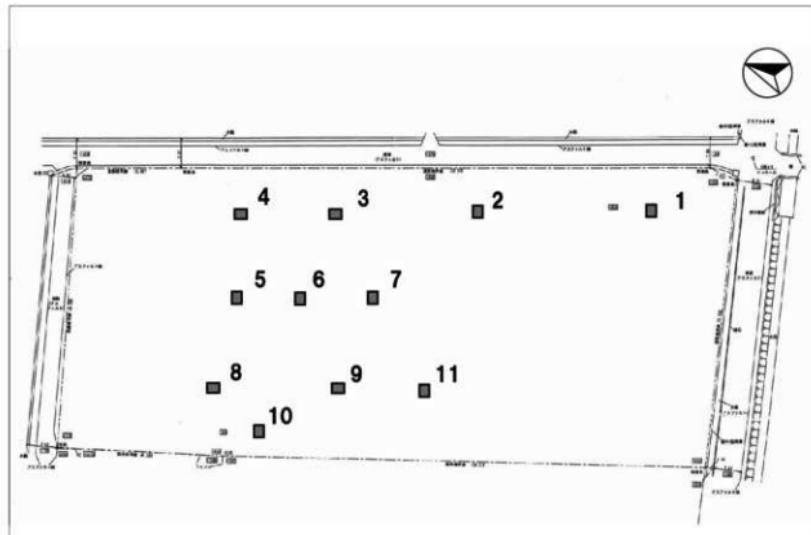
南側の表土上面は碎石が転圧されており、ビニールやコンクリート片などを大量に含む、現代の盛土が最大で250cmにわたって堆積していた。盛土量は北側へ進むにしたがって、少なくなっていた。11トレンチの表土下130cmから、木組みの水路が検出されたが、水路内まで造成が及んでおり、戦後の施設であると判断した。当該地からは遺構・遺物は検出されなかった。

c. 所見

当該地については、遺跡は存在しないと判断した。



第7図 老人福祉施設建設事業 調査位置図 (1:5,000)



第8図 老人福祉施設建設事業 トレンチ配置図 (1:1,200)



調査地全景



1 トレンチ調査状況



3 トレンチ調査状況



5 トレンチ調査状況



7 トレンチ調査状況



8 トレンチ調査状況



9 トレンチ調査状況



11 トレンチ調査状況

写真3 老人福祉施設建設事業 調査地と調査状況

第3節 平成22年度の調査

(1) 携帯電話基地局建設事業（周知の埋蔵文化財包蔵地外）

調査地 男鹿市北浦北浦字泉野15-1

調査期日 平成22年4月15日

調査面積 8m²（調査対象面積45m²）

調査に至る経緯

KDDI株式会社仙台エンジニアリングセンターは、北浦字泉野地区で携帯電話基地局建設事業を予定していることから、男鹿市教育委員会へ事業予定地区における埋蔵文化財の有無を照会した。市教委は、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されてはいないものの、周囲に遺跡が存在することなどから遺跡が存在する可能性があると判断し、事前調査の必要性がある旨をKDDI株式会社仙台エンジニアリングセンターへ回答した。その結果、KDDI株式会社仙台エンジニアリングセンターから平成22年3月25日付けで事前調査の依頼があり、埋蔵文化財の有無を確かめるため、試掘調査を実施した。

立地と現況

当該地は主要地方道入道崎・寒風山線沿いの北浦字泉野に位置する。東西にはそれぞれ賀茂川、相川が流れしており、両河川に挟まれた標高約37mの台地中央部に立地する。現況は畠地である。

調査の概要及び結果

調査は事業予定地にトレチ3本を設定して、人力により試掘し、遺構・遺物の有無を確認した。
1 トレチは2.0m×2.0m、2・3 トレチは1.0m×2.0mとした。

a. 層序

調査地の基本層序は下記の通りである。

第Ⅰ層：表 土【20~40cm、黒褐色、シルト質の耕作土】

第Ⅱ層：地山漸移層【10~15cm、明黄褐色、シルト質土】

第Ⅲ層：地 山 土【黄褐色、シルト質土】

※【】内の数値は、各トレチで得られた堆積の厚さを示す。

b. 検出遺構と出土遺物

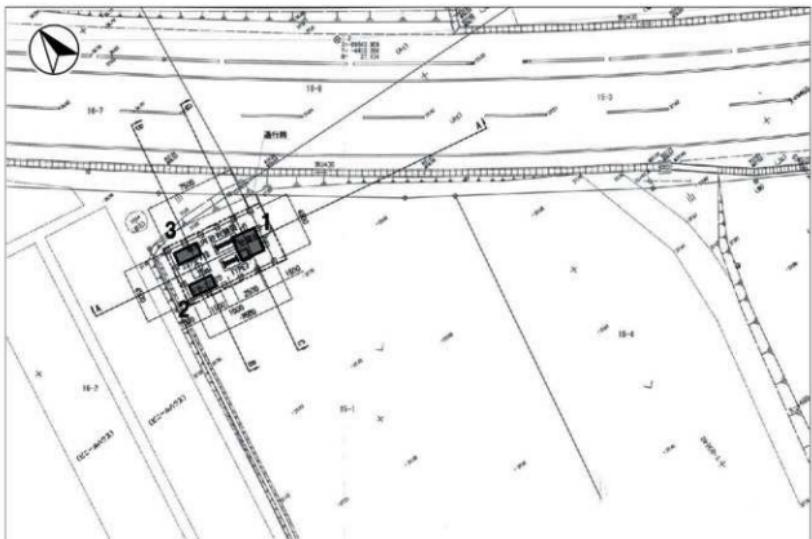
地山であるⅢ層上面にて遺構確認を行ったが、遺構・遺物の発見はなかった。

c. 所見

当該地については、遺跡は存在しないと判断した。



第9図 携帯電話基地局建設事業 調査位置図 (1:5,000)



第10図 携帯電話基地局建設事業 トレンチ配置図 (1:400)



調査地全景



調査地近景



1 トレンチ調査状況



2 トレンチ調査状況



3 トレンチ調査状況

写真4 携帯電話基地局建設事業 調査地と調査状況

(2) 船越第5排水区雨水幹線整備事業（周知の埋蔵文化財包蔵地外）

調査地 男鹿市船越字一向233

調査期日 平成22年8月31日

調査面積 26.25m²（調査対象面積6,250m²）

調査に至る経緯

男鹿市産業建設部下水道課は、船越字一向地区で雨水幹線整備事業を予定していることから、男鹿市教育委員会へ事業予定地区における埋蔵文化財の有無を照会した。市教委は、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されてはいないものの、周間に遺跡が存在することなどから遺跡が存在する可能性があると判断し、事前調査の必要性がある旨を市産業建設部下水道課へ回答した。その結果、市産業建設部下水道課から平成22年4月26日付けで事前調査の依頼があり、埋蔵文化財の有無を確かめるため、試掘調査を実施した。

立地と現況

当該地は船越水道にかかる男鹿大橋の北東部に位置し、船越漁港に隣接する。標高0～3mの低湿地で、際立った土地利用はなされておらず、現況は水路と原野になっている。

調査の概要及び結果

調査は事業予定地にトレーナー4本を設定して、重機により表土除去を行った。その後、人力にて精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。1～4トレーナーともに2.0m×3.0mを基本としたが、適宜拡張して確認を行った。

a. 層序

調査地の基本層序は下記の通りである。

第I層：表土【5～20cm】

第II層：盛土【30～70cm、褐色、砂質土】

第III層：堆積土【70cm、黒褐色、シルト質土、腐敗植物質を多く含む自然堆積土（4トレーナーのみ検出）】

第IV層：地山土【青灰色、砂質土】

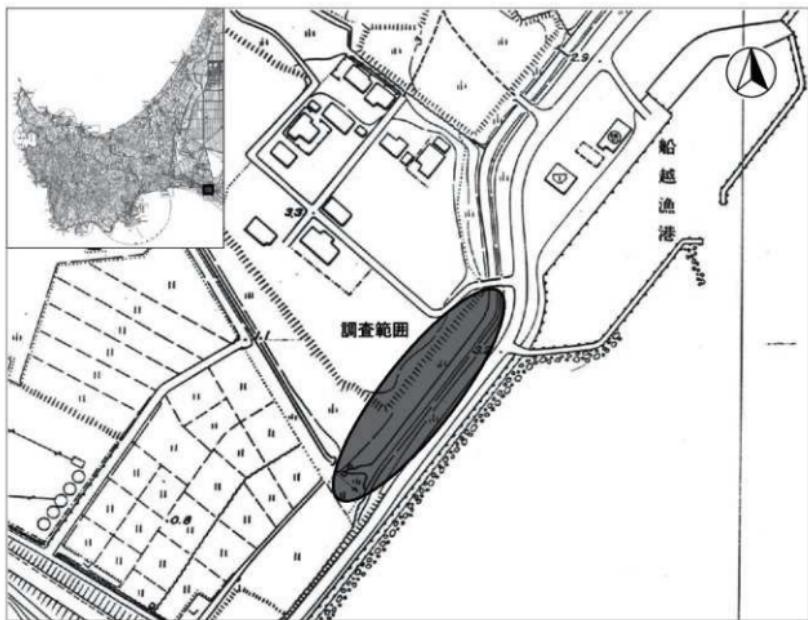
*【】内の数値は、各トレーナーで得られた堆積の厚さを示す。

b. 検出遺構と出土遺物

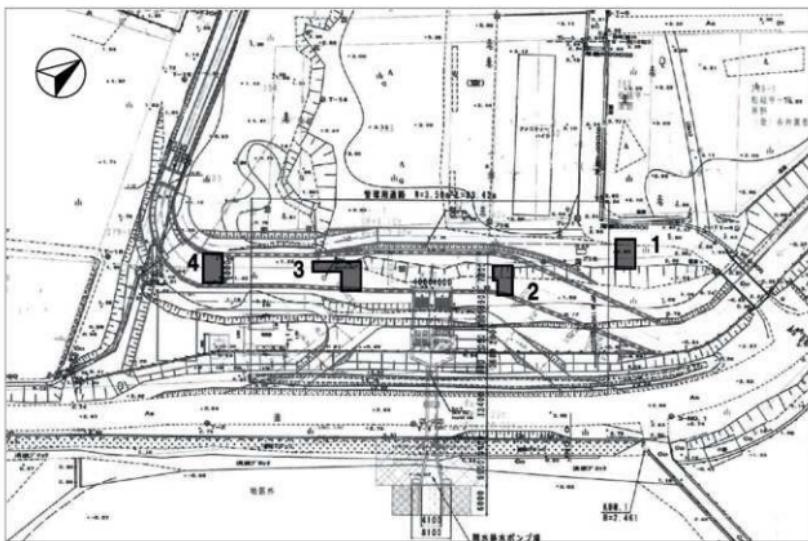
1～3トレーナーでは地山であるIV層、4トレーナーでは自然堆積層と判断されるIII層上面及び地山であるIV層上面にて遺構確認を行った。その結果、2、3トレーナーにおいて、現在の船越水道とほぼ並行して、2列の板材と丸太材が検出された。両者はそれぞれ約1.8m離れて並行しており、板材と丸太材をアンカーボルトで組んだもので、護岸補強を目的とした施設であることが考えられた。しかし、鉄製のボルトで組んであること、板材の間にビニール等が混入していたことから、昭和30年代の旧八郎潟干拓工事に近接した時期の施設と判断された。その他、遺構・遺物の検出は無かった。

c. 所見

当該地については、遺跡は存在しないと判断した。



第11図 船越第5排水区雨水幹線整備事業 調査位置図（1：2,500）



第12図 船越第5排水区雨水幹線整備事業 トレーンチ配置図（1：500）



調査地全景



2 トレンチ調査状況



2 トレンチ近現代護岸材検出状況



3 トレンチ調査状況①



3 トレンチ調査状況②



3 トレンチ近現代護岸材検出状況



3 トレンチ出土アンカーボルト



4 トレンチ調査状況

写真 5 船越第 5 排水区雨水幹線整備事業 調査地と調査状況

(3) 携帯電話基地局建設事業（前野V遺跡）

調査地 男鹿市脇本脇本字前野98

調査期日 平成22年11月25日

調査面積 15m² (調査対象面積78.81m²)

調査に至る経緯

KDDI株式会社仙台エンジニアリングセンターは、脇本字前野地区で携帯電話基地局建設事業を予定していることから、事業予定地区における埋蔵文化財の有無を照会した。市教委は、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である前野V遺跡に位置するため、事前調査の必要性がある旨をKDDI株式会社仙台エンジニアリングセンターへ回答した。その結果、KDDI株式会社仙台エンジニアリングセンターから平成22年11月9日付けで事前調査の依頼があり、埋蔵文化財の有無を確かめるため、試掘調査を実施した。

立地と現況

当該地は主要地方道秋田・男鹿線沿いの脇本字前野に位置する。一帯は第四紀完新世に形成された標高約12mの船越・天王砂丘上に位置する。現況は個人宅地の敷地内であるが、付近の畑に伴った資材置き場として利用されていた。当該地一帯は周囲の道路や敷地などに比べ、50~80cmほど標高が低くなっている、過去に削平を受けたことが想定された。土地所有者に聞き取りを行ったが、耕作中に遺物の出土はなかったようである。

調査の概要及び結果

調査は事業予定地にトレント3本を設定して、重機により表土除去を行った。その後、人力にて精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。1トレントが1.2m×5.0m、2トレントが1.2m×4.5m、3トレントが1.2m×3.0mとした。また、3トレントは当該地に南西側で確認される不自然な高まりを対象として設定した。

a. 層序

調査地の基本層序は下記の通りである。

第Ⅰ層：表土【70~100cm、黒褐色、砂質土（廃材や現代陶磁器、ビニールなどを多量に含む）】

第Ⅱ層：地山土【60cm~、黄灰色、砂質土】

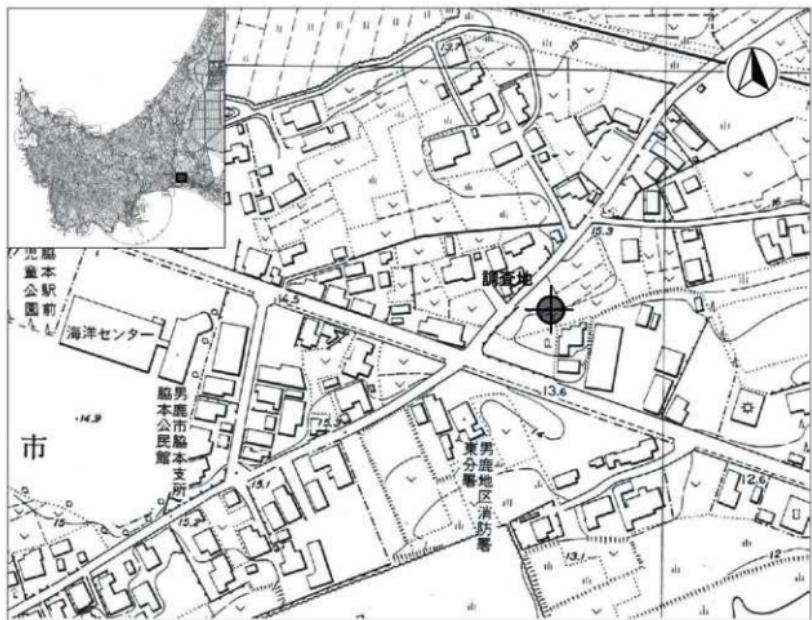
※【】内の数値は、各トレントで得られた堆積の厚さを示す。

b. 検出遺構と出土遺物

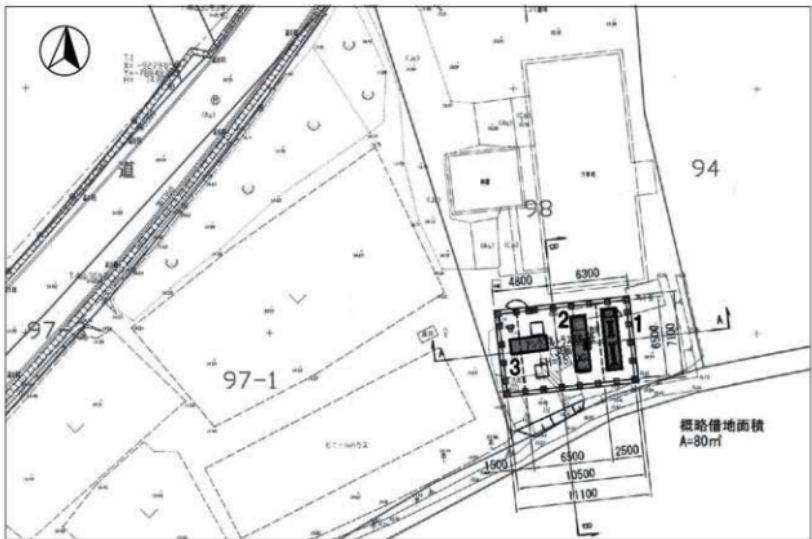
地山であるⅡ層上面にて遺構確認を行ったが、遺構・遺物の発見はなかった。また、当該地南西側で確認される不自然な高まりについては、3トレントで一部断ち切ったところ、資材や表土による現代の盛土であった。

c. 所見

表土直下が地山となっており、遺構・遺物が発見されないことから、当該地について既に遺跡は失われていると判断した。



第13図 携帯電話基地局建設事業 調査位置図 (1:2,500)



第14図 携帯電話基地局建設事業 トレンチ配置図 (1:400)



調査地全景



1 トレンチ調査状況



1 トレンチ地山堆積状況



2 トレンチ調査状況



3 トレンチ調査状況

写真 6 携帯電話基地局建設事業 調査地と調査状況

(4) 店舗建設事業（周知の埋蔵文化財包蔵地外）

調査地 男鹿市船越字内子294-36

調査期日 平成23年2月9日

調査面積 14.25m² (調査対象面積1744.96m²)

調査に至る経緯

株式会社ローソンは、船越字内子地区で店舗建設事業を予定していることから、事業予定地区における埋蔵文化財の有無を照会した。市教委は、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されてはいないものの、周囲に遺跡が存在することなどから遺跡が存在する可能性があると判断し、事前調査の必要性がある旨を株式会社ローソンへ回答した。その結果、株式会社ローソンから平成23年1月7日付けで事前調査の依頼があり、埋蔵文化財の有無を確かめるため、試掘調査を実施した。

立地と現況

当該地は主要地方道男鹿・八竜線船越陸橋と国道101号線の交差点北西、船越字内子に位置する。一帯は標高約6mで第四紀完新世に形成された船越・天王砂丘上となる。現況は南側が既存の店舗建設地及び駐車場、北側はハウス等が立ち並ぶ畠地となっている。

調査の概要及び結果

調査は事業予定地南側の畠地を中心に、トレンチ6本を設定して、重機により表土除去を行った。その後、人力にて精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。1・3・6トレンチは1.5m×3.5m、2・4・5トレンチを1.5m×2.0mと設定して行った。また、土地所有者の意向により現況のハウス等はそのままの状態で実施した。

a. 層序

調査地の基本層序は下記の通りである。

第Ⅰ層：表 土【~40cm、褐色、砂質土、耕作土（4~6トレンチについては畠内の通路となっており、盛土の後、転圧されていた。盛土はビニール等を含む現代の造成土】】

第Ⅱ層：地山漸移層【10cm~20cm、黒褐色、砂質土】

第Ⅲ層：地 山 土【50cm以上、青灰色、砂質土、湧水著しい】

※【】内の数値は、各トレンチで得られた堆積の厚さを示す。

b. 検出遺構と出土遺物

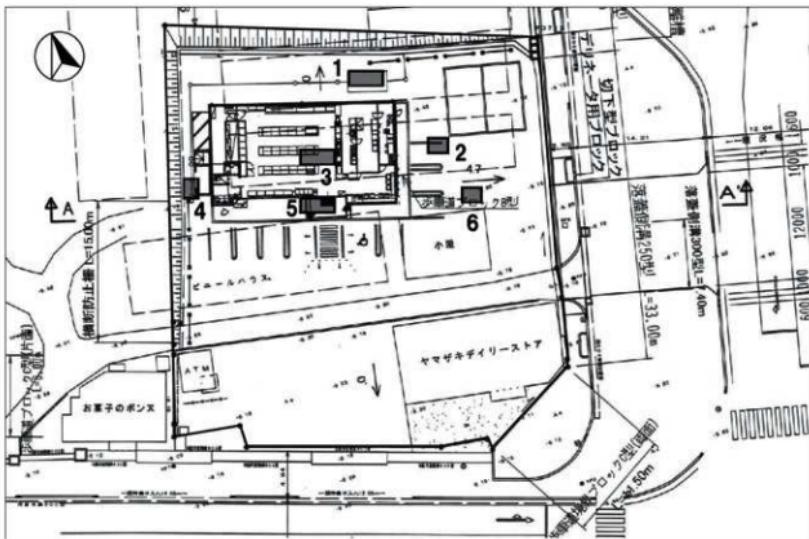
Ⅱ層及び地山であるⅢ層上面にて遺構確認を行ったが、遺構・遺物の発見はなかった。表土から30cm程度で地山となっていること、4~6トレンチの通路箇所に関しては造成盛土であった点から、畠となる以前に大規模な削平があったことが考えられた。土地所有者に聞き取りを行ったところ、元々は林であったが、隣接する田に盛土をするため大規模に土砂を探取し、その後畠としたようである。

c. 所見

当該地については、遺跡は存在しないと判断した。



第15図 店舗建設事業 調査位置図 (1 : 5,000)



第16図 店舗建設事業 トレンチ配置図 (1 : 500)



調査地全景



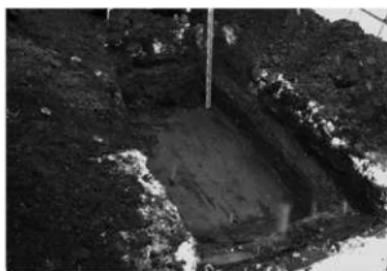
1 トレンチ調査状況



2 トレンチ調査状況



3 トレンチ調査状況



5 トレンチ調査状況



6 トレンチ土層堆積状況



6 トレンチ調査状況

写真 7 店舗建設事業 調査地と調査状況

(5) 携帯電話基地局建設事業（周知の埋蔵文化財包蔵地外）

調査地 男鹿市船川港双六字蕨台104

調査期日 平成23年2月17日

調査面積 11.25m²（調査対象面積25.6m²）

調査に至る経緯

KDDI株式会社仙台エンジニアリングセンターは、船川港双六字蕨台地区で携帯電話基地局建設事業を予定していることから、事業予定地区における埋蔵文化財の有無を照会した。市教委は、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されてはいないものの、周囲に遺跡が存在することなどから遺跡が存在する可能性があると判断し、事前調査の必要性がある旨をKDDI株式会社仙台エンジニアリングセンターへ回答した。その結果、KDDI株式会社仙台エンジニアリングセンターから平成23年1月27日付けで事前調査の依頼があった。また、当該地は男鹿国定公園内の第3種特別地域内に位置するため、自然公園法第20条に基づき、平成23年2月1日付け特別地域（特別保護地区）内鉱物の採取（土砂の採取）許可申請書を秋田県知事へ提出し、平成23年2月15日付け指令自-2039をもって許可された。その後、埋蔵文化財の有無を確かめるため、試掘調査を実施した。

立地と現況

当該地は主要地方道男鹿半島線館山トンネル北西の丘陵中腹に位置する。付近一帯の標高は35m前後であり、平坦に造成され、現況は畑地となっている。当該地南側の館山崎は、中世陶器が出土し、双六館跡として周知されている。

調査の概要及び結果

調査は事業予定地にトレント3本を設定して、重機により表土除去を行った。その後、人力にて精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。1~3トレントともに、1.5m×2.5mに設定した。

a. 層序

調査地の基本層序は下記の通りである。

第Ⅰ層：表土【~50cm、暗褐色、シルト質土、耕作土】

第Ⅱ層：地山土【50cm~、茶褐色、粘質土、自然縫が多く含む、1トレントにおいて、表土下90cm以下からは青灰色粘質土となり湧水が著しくなる】

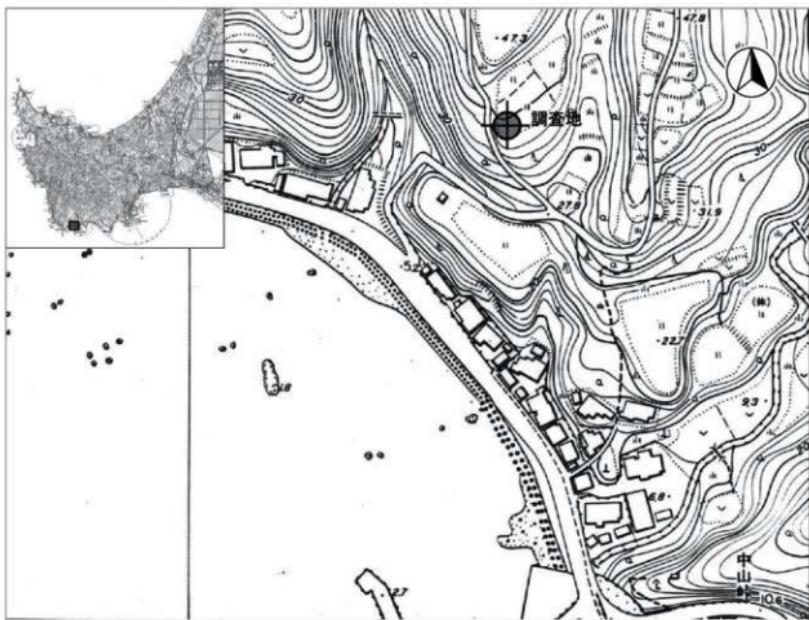
*【】内の数値は、各トレントで得られた堆積の厚さを示す。

b. 検出遺構と出土遺物

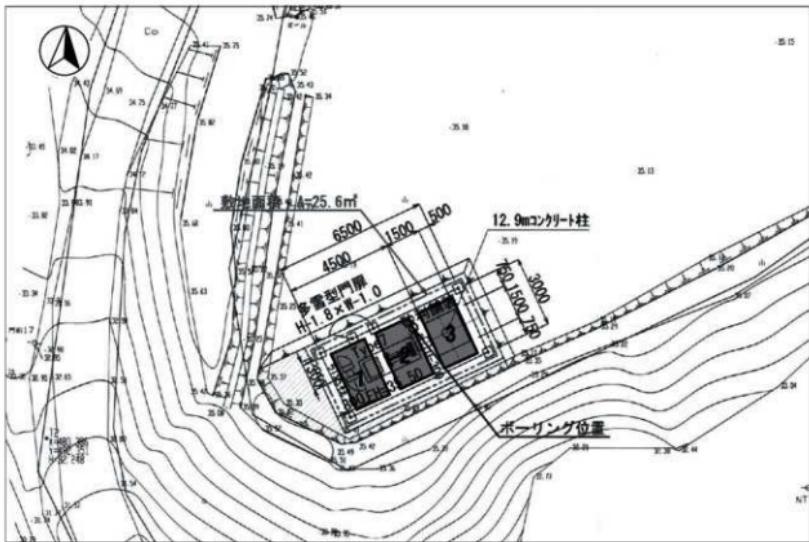
地山であるⅡ層上面にて遺構確認を行ったが、遺構・遺物の発見はなかった。斜面の中腹に位置し、畑の造成に伴って新たに開墾されたものと考えられる。

c. 所見

当該地については、遺跡は存在しないと判断した。



第17図 携帯電話基地局建設事業 調査位置図 (1 : 2,500)



第18図 携帯電話基地局建設事業 トレンチ配置図 (1 : 200)



調査地全景



1 トレンチ調査状況



2 トレンチ調査状況



2 トレンチ土層堆積状況



3 トレンチ調査状況

写真 8 携帯電話基地局建設事業 調査地と調査状況

参考文献

- 秋田県1973『男鹿半島自然公園学術調査報告』
- 秋田県教育委員会1981『秋田県の中世城館』
- 秋田県教育委員会2001『泉野冷水遺跡・中野遺跡』秋田県文化財調査報告書第312集
- 磯村朝次郎編1978『船越誌—その自然と歴史—』船越経友会
- 男鹿市1995『男鹿市史』
- 男鹿市教育委員会1976『泉野遺跡発掘調査概報』男鹿市文化財調査報告書第1集
- 男鹿市教育委員会1992『双六館遺跡発掘調査報告書』男鹿市文化財調査報告書第6集
- 男鹿市教育委員会1993『双六館遺跡発掘調査報告書』男鹿市文化財調査報告書第7集
- 男鹿市教育委員会1996『男鹿市の文化財』第11集
- 男鹿市教育委員会1998『男鹿半島その自然・歴史・民俗』
- 男鹿市教育委員会・男鹿をまるごと探検隊2002『男鹿半島地層観察ガイド』
- 男鹿市教育委員会2002『前野IV遺跡』男鹿市文化財調査報告第25集
- 男鹿市教育委員会2005『市内遺跡詳細分布調査・確認調査報告書』男鹿市文化財調査報告第30集
- 男鹿市教育委員会2009『市内遺跡詳細分布調査報告書』男鹿市文化財調査報告第36集
- 栗山知士2005『男鹿半島、脇本城跡の立地に関わる地形』『国指定史跡脇本城跡』男鹿市文化財調査報告
第29集
- 白石健雄2005『男鹿半島と八郎湯・秋田平野』『日本の地形3東北』東京大学出版会
- 藤本幸雄・林信太郎・渡部晟・栗山知士・西村隆・渡部均・阿部雅彦・小田嶋博2008『地学教育の素材
としての男鹿半島』『地質学雑誌』第114巻補遺pp51-74
- 的場保望ほか1989『男鹿地域』『日本の地質2東北地方』共立出版
- 若美町1977『若美町資料』
- 若美町1981『若美町史』

報告書抄録

ふりがな	しないいせきしきつ かくにんちょうさほうこくしょ						
書名	市内遺跡試掘・確認調査報告書						
副書名							
シリーズ名	男鹿市文化財調査報告						
シリーズ番号	第38集						
編集者名	伊藤直子 五十嵐祐介						
編集機関	男鹿市教育委員会						
所在地	〒010-0493 秋田県男鹿市角岡崎字家ノ下452						
発行年月日	2011年3月31日						
		コード	北緯	東経	期間	面積	原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡No	° ° °	° ° °	(m ²)	
(開発予定地)	男鹿市船越字根本		—	39 54 39	139 55 46	20090318	24 店舗兼事務所建設事業
(開発予定地)	男鹿市脇本脇本字船荷下		—	39 54 21	139 53 55	20090806	18 農地造成事業
(開発予定地)	男鹿市私江字波部		—	39 56 20	139 55 44	20091021 ~20091022	55 老人福祉施設建設事業
(開発予定地)	男鹿市北浦北浦字京野		—	39 57 17	139 47 5	20100115	8 携帯電話基地局建設事業
(開発予定地)	男鹿市船越一向		—	39 53 46	139 57 3	20100831	26.25 船越第5排水区雨水幹線整備事業
前野V遺跡	男鹿市脇本脇本字前野	68	39 53 54	139 57 3	20101125	15	携帯電話基地局建設事業
(開発予定地)	男鹿市船越字内子		—	39 54 21	139 55 36	20110209	14.25 店舗建設事業
(開発予定地)	男鹿市船川港双六字裏台		—	39 51 53	139 46 27	20110217	11.25 携帯電話基地局建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
前野V遺跡	遺物散布地	古代	なし		なし		

男鹿市文化財調査報告第38集
市内遺跡試掘・確認調査報告書

印刷・発行 平成23年3月
発 行 秋田県男鹿市教育委員会
〒010-0493 男鹿市角間崎字家ノ下452
TEL (0185) 46-4110 FAX (0185) 46-2141
印 刷 秋田協同印刷株式会社
